

能登半島地震で被災した子ども達へのメッセージ

高山市教育委員会 教育委員 野崎加世子

令和6年1月1日16時10分 能登半島を中心としたマグニチュード7.6 輪島の東北東30km付近に大地震が発生した。また、それに伴い能登地域には最大5mの津波の発生があり、甚大な被害が報告された。

私の住む高山でも震度5弱の地震を経験し、屋根やガラスなどに被害があった。震度5でこれほどの恐怖を感じるのに、さぞ、現地の被災者は恐怖であったと推察する。

ライフラインが切断され、その後の生活にも多くの弊害があり「早く普通の生活をしたい」との言葉が胸にしみる。子ども達はどのようにしているだろうと真っ先に考えた。

平成23年3月11日14時43分に東日本大震災、マグニチュード9.0 海岸を襲った津波は8メートルから9メートルを超えた。

当時私は看護師をしており、災害支援ナースとして4月初めに宮城県石巻市の300人が避難所として利用する小学校に派遣された。ライフラインは寸断され、まだ食料も充分でなく医療ケアが必要な高齢者や、感染症に苦しむ方々の看護に明け暮れた。

そんな中、助けてくれたのは、避難所にいてまだ学校が開催されない小学生・中学生の子ども達であった。ご飯を取りに行けないお年寄りのために食事を運んだり、手が足りないときは食事介助をしてくれたりした。男子中学生は、自衛隊の方々のお手伝いの瓦礫の処理や、荷物の運搬などを積極的に行ってくれた。まだ小学校低学年の子ども達は、自分より小さい保育園や幼児の子守りをし、親の負担を軽くしていた。

そんな姿を見た避難者の大人たちは「子ども達があんなに頑張っているなら、私達も泣いてばかりおっでは恥ずかしい」と少しずつ行動にうつされた。

そこに居る皆が、子ども達の笑顔や一生懸命さに助けられた日々であった。

1週間の支援期間であったが、自分の人生にとって忘れられない経験であった。帰ってきてから、市内の小学校や中学校で災害支援の報告をしたが、一番伝えなかったのは、災害はいつどこで起きるかもわからない事、まずは、大切な自分の命を守ることを伝えなかった。

今回の地震でも、多くの子ども達にとって過酷な現状があると思う。しかし、今回の経験を何か一つでも自分が成長する機会につなげてくれたらうれしいと思う。

未来のある子ども達が、前を向いて頑張る姿が、被災された他の多くの人を勇気づけることを知ってほしい。皆には大きな力があるのだから。

おせち料理

垂井町教育委員会 教育委員 亀山 桂子

今年 83 歳になった母が言った。

「おせち、どうする？」—とうとうである。

わが家のおせちは、全て手作りだ。メニューを決め、買い物をして、下ごしらえをし、31 日には母とキッチンにこもる。ここ何年か、少しずつ作る量を減らしてはいるが大変なのだろう。そういえば、この頃「めんどくさい」と言うのが増えた。

そこで、手のかかる昆布巻だけを一緒に作り、あとはそれぞれで作ることにした。

その事をリモート飲み会で、息子たちに話した。

東京で働いている二人とは、コロナが広まってきたときから、夫と四人で毎月開催している。

次男が 「わかった。じゃあ全面協力するよ。」 と言った。となりで長男もうんうんとうなずいている。

そうだった。二人は自炊派なのだった。帰省した時も、気軽にキッチンに立ち、料理や片付けをする。

私はもちろん助手をお願いした。

三人で作れば、何とかなるだろう。新作にも挑戦してみよう。そしてそれを、実家におすそ分けしよう。

父と母は、驚きながら、でも喜んで食べてくれるだろう。

永遠は、ない。

でも、母の味は確かに私の中にある。

いつか、わたしがおせち料理の卒業を宣言したら、誰かが繋いでくれるだろうか。

終わりになっても、それもいい。

その時まで 重箱におせちを詰めよう。